

羽田空港空撮図。産業交流拠点「(仮称)羽田グローバルアライアンスセンター」及び多目的広場の予定地は左下・天空橋駅周辺のエリア



未来へ躍動する国際都市 おおた

～産業交流拠点・多文化共生都市の形成をめざして～

平成22年に再国際化が実現した羽田空港という空の玄関口をもち、外国人観光客が最初に足を踏み入れる地である大田区は、国際都市としてさまざまな取組を行っています。

アジアヘッドクォーター特区のエリアである羽田空港跡地内に実現をめざす産業交流拠点「(仮称)羽田グローバルアライアンスセンター」や新空港線の整備、多文化共生推進など、開催が決定した2020東京オリンピック・パラリンピックを前に“国際都市おおた”として、さまざまな施策に取り組んでいます。

世界へ羽ばたく
まちづくり

世界へ発信する産業交流拠点

平成22年10月に羽田空港の再国際化が実現し、アジアをはじめ海外との交流機会が増えています。大田区ではこの機会をとらえ、産業交流拠点と多文化共生都市の形成をめざし、さまざまな取組を行っています。

羽田空港の旅客数は現在、世界第4位を誇ります。平成26年春からは昼間時間帯の国際線発着枠がさらに増える予定で、これまでに以上に空港を結節点とした人・もの・情報の国際交流が活発化し、首都東京の空の玄関口としての役割や機能が飛躍的に増大することが予想されます。

羽田空港はこれまで、数度にわたる沖合展開により拡張されてきましたが、それによって発生した羽田空港跡地の一部は、都が進めている国際戦略総合特区「アジアヘッドクォーター特区」のエリアであり、「ものづくり日本」の再構築に向けた取組を予定しています。アジアヘッドクォーター特区では、日本の国際競争力の向上をめざし、平成28年度までに、アジア地域の業務統



イラストは産業交流拠点、天空橋駅前広場と多目的広場のイメージ

括拠点・研究開発拠点を設立する外国企業50社を含む外国企業500社以上の誘致を目標としており、進出する企業に対して規制緩和や税制等の支援措置を総合的に行います。

また、この羽田空港跡地は、平成25年9月、都が提案した国家戦略特区「世界で一番ビジネスのしやすい国際都市づくり特区」のエリアにも含まれています。

国際競争の中で、今後対日投資の誘導や海外市場を獲得していくためには、日本のものづくりの技術力やアイデアを世界に示し、海外の企業や人材を惹き付けなくてはなりません。

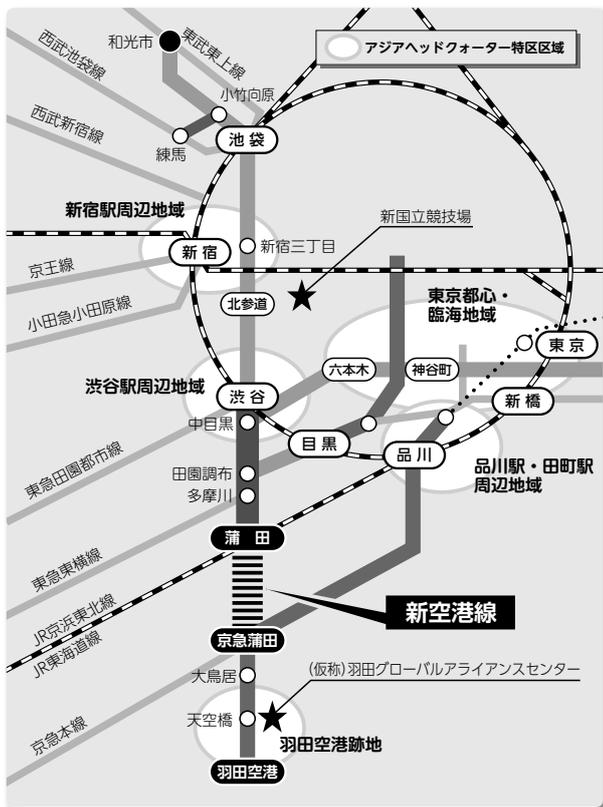
そのため、ものづくり企業が集積する大田区では、24時間運用の国際空港と近接している地の利を生かし、国・都と協力し、国内だけではなく海外も視野に入れた産業交流拠点を、平成32年をめどにこの羽田空港跡地に整備しようとしています。

海外からの企業・人材を呼び込み、国内外のものづくりのニーズをつなぎ、新製品・新技術の創出をめざします。さらに、日本が世界に誇る食や農産品、伝統文化などの「クールジャパン」を世界に発信する機能を導入し、海外需要の獲得に貢献します。こうした取組により、大田区をはじめ、23区のものづくり中小企業の基盤技術や地域資源をアピールし、新たな市場の獲得につながる拠点として活用するなど、国際ビジネス展開の可能性を高めます。

新空港線の整備

羽田空港での国際線の運航が増加するに伴い、空港から都心などへの交通アクセスの強化が求められています。こうした中、区は平成12年の運輸政策審議会答申第18号において平成27年までに整備することが適当である路線として位置づけられているJR・東急蒲田駅と京急蒲田駅を結ぶ「新空港線」

●新空港線の整備により広がる鉄道ネットワーク



区内の移動が便利になるだけでなく、東急東横線方面へのアクセスが向上し、東京メトロ副都心線・東武東上線・西武池袋線方面や、東急目黒線・東京メトロ日比谷線など多方面への移動もスムーズになる

の早期整備に向けて取り組んでいます。JR・東急蒲田駅と京急蒲田駅の間は、約800m(徒歩10分)離れており、接続改善に対する区民からの要望は高く、区のまちづくりの重要な課題のひとつとなっています。わずか800mを鉄道で結ぶことで、区内移動はもちろん24時間国際拠点空港として一層の機能強化が見込まれる羽田空港と都心部などへの公共交通アクセスが飛躍的に向上します。

また、大井町・品川や川崎・横浜方面はもちろん、アジアヘッドクォーター特区エリアである渋谷や新宿、六本木などと羽田空港間の移動利便性が向上し、世界で一番ビジネスのしやすい都市環境づくりに貢献します。将来的には、(仮称)区部周辺部環状公共交通(エイトライナー及びメトロセブン)との接続を想定しており、新空港線が同路線整備の突破口ともなります。新空港線が日本の空の玄関口である羽田空港と飛躍する東京の「夢」と「未来」をつなぎます。

平成25年8月に行われた大蒲田祭では、「来～る大田区大使」たちが子どもたちと一緒に打ち水の体験を行った



このブックレットを指し示してもらうことで、外国人旅行者とコミュニケーションがとれる

誰もが過ごしやすい まちづくり

大田区は羽田空港があるということもあり、前泊・後泊で区内の宿泊施設を利用する外国人旅行者が少なくありません。今後も国際線の運航増加、オリンピック・パラリンピックの開催決定等により増加が見込まれる旅行者を受け入れるためにさまざまな取組を行っています。

区では蒲田が平成23年から観光庁の訪日外国人旅行者受入環境整備の戦略

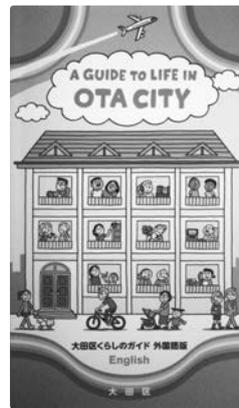
「大田区ウェルカムショップ」と「大田区まちかど観光案内所」のステッカー。登録店舗は入口のわかりやすいところにこのステッカーを掲示する



「外国人対応おもてなし研修」は平成24年度は3回開催され、延べ55名の参加があった。日本らしいおもてなしや、各国のお客様の特徴について学んだり、実際に外国人の方を招いてロールプレイ形式で実践練習を行ったりする



区が発行する「大田区くらしのガイド外国語版」(英語・中国語・ハングルの3言語版)には、行政での手続方法や日本でのマナー、ごみの分別の仕方から交通ルールや病院の案内まで、日本で暮らしていくのに必要な情報が網羅されている。こうしたガイドブックを言語別に作成している例は大田区を含め数区だけである



拠点のひとつに選ばれたことを受け、「大田区ウェルカムショップ」「大田区まちかど観光案内所」登録制度を開始しました。

「大田区ウェルカムショップ」は、外国人の方が安心して飲食や買い物、観光、宿泊のできる店舗や宿泊施設です。各店舗には区から配布する指差しブックレット等のツールを活用し、サービスを提供しています。この店舗は、区が実施する「外国人対応おもてなし研修」を優先的に受講することができます。

一方、「大田区まちかど観光案内所」は、来訪者に情報提供をする店舗や宿泊施設等で、観光マップ・パンフレットの配布や、近隣の案内をしています。店舗に設置されたマップが便利であると好評で、来訪者への情報や話題の提供で役立っています。

そのほかにも、平成21年度から区では、区内在住・在勤・在学等の大田区に縁のある外国人の方々を大田区観光大使「来～る大田区大使」として2年の任期で任命しています。大使は、区で実施されるイベント等への参加を通

じて感じた大田区の魅力を、SNS等のインターネットや個人々人の人脈を活用して出身国など世界中に発信しています。

この試みによる観光大使は平成25年度で延べ14の国と地域・41人となりました。昨年度は大使の働きかけによりタイの政府関係者が来訪し、区内を大使が案内しました。また、今年度も有名プログラマーをタイから招へいするなどさまざまな取組が進められています。

さらに区では、増加する在住外国人が快適に暮らすための支援を目的として、平成22年9月、区役所に近接する消費者生活センター内に、区内に住む外国人向けに多言語対応の無料相談及び通訳を行う多文化共生推進センター「m i c s おおた」を開設しました。

外国籍区民の4割が蒲田地区に集中していること、区との連携がとりやすいという点から、区役所本庁舎近辺の場所が選ばれました。

日本語を母語としない区民が困らないように、生活相談を多言語で受けたり、区役所の手続き等の説明や窓口での通訳、行政情報の翻訳、外国籍区民と日本国籍区民との交流イベントや日本語教室の開催等を行っています。

ものづくりの技術で 世界をめざす

日本を支える大田区のものづくり

23区一の工場数を誇る大田区は、従業員9人以下の企業が約82パーセントを占める「中小企業のまち」です。中でも機械金属工業は、多種多様な技術の集積と企業間ネットワークを生かして、高精度で複合的な加工技術と短期化に対応できる迅速性を実現し、日本の産業の先端的な技術開発を支えています。

区では、こうした優れた加工技術・技能を活用して、国内外を問わず成長市場である医療関連機器分野への参入促進を図るために医工連携事業を推進

医工連携の取組によって製作された心臓弁膜症の手術に使う弁尖寸法測定用器具「Ozサイザー」（有限会社安久工機）。これにより心臓の弁の大きさの測定が可能となり、手術中に患者自身の心臓から弁を作り、心臓に縫い付けることができるので、患者の生体的・経済的負担が減る



JOTA TECHNO PARKは、タイ国内への工場開設や市場開拓等を支援するために設立された、大田区内の中小企業向け賃貸集合工場

しています。

平成24年11月には医療機関と区内中小企業の連携を支援する拠点として、東京労災病院医工連携室と大田区産業振興協会の医工連携支援室が一緒になり、大田区医工連携支援センターを開設しました。医療と製造業の関係者が交流し情報交換する場を設けることで、医療現場のニーズを把握し、新しい医療機器・器具の開発を進めています。

これまでに胃カメラなどの医療機器に使用される線径0・03ミリの超精密ばねや、不快な音を大幅にカットした歯石除去器、真空ポンプの技術を生かした医療用麻酔ガス吸引機等の開発など、共同開発案件はすでに70程度まで拡大しています。

さらに、大田区産業振興協会では、大田区企業の医療分野における海外展開を支援するため、中国やタイなどアジアを中心に、長年海外見本市への共同出展支援を続けています。

加えて平成18年6月には、海外展開や新分野の開拓に取り組む企業の支援として、タイ国内で最大規模を誇る「アマタナコン工業団地」内に、「O T A T E C H N O P A R K」（大田区中小企業向け賃貸集合工場）が開設されました。円滑な操業体制が整備で

きるようにサポートするとともに、アジア圏への展開に向けて、大田区中小企業の海外取引拡大を支援しています。これまでに7社が入居し、うち1社は同団地内に新工場を開設しました。

平成25年11月には、ドイツで開催された医療機器部品の国際見本市「C O M P A M E D」にはじめて出展し、区内中小製造業5社が自社技術をアピールし、欧州をはじめ海外市場の開拓を行いました。

大田区から世界への挑戦

スポーツの世界でも大田区の技術で世界に挑戦する取組が広がっています。

ボブスレーはオリンピックの競技種目のひとつにもなっているスポーツですが、選手が使用するソリを、イタリアではフェラーリ、ドイツではBMWと、自国を代表する自動車メーカー等が開発を行っています。しかしこれまで日本では、多くの選手が資金不足に悩み海外から中古のソリを調達して競技に挑んできました。

そこで、大田区の町工場が集結し、国産ボブスレーソリを開発し、冬季オリンピック出場をめざそうというプロジェクトが立ち上げられました。約150点の部品制作を有志約30社

が協力して無償で行い、平成24年11月に1号機のソリを完成させました。

日本で作るため、日本人の選手の意見に合わせて細かな調整ができ、それが乗り心地やスピードにも大きく影響してきます。

大田区のものづくりの力を世界に示すことができるよい機会であり、大田区産業振興協会でもこの活動が区内の産業振興に貢献すると判断し、全面的に支援しています。

今年のソチオリンピックには改良が間に合いませんでしたが、現在、次の韓国・ピョンチャンオリンピックをめざして開発が進められています。

この下町ボブスレーの取組は海外選手やコーチなど各所からも高い注目を集めており、区内外の多数の方々から寄付金や応援メッセージが届いています。



区内町工場の技術を結集して開発された「下町ボブスレー」。写真は平成25年3月に行われたアメリカ大会出場の様子